

にした。

・ A子が欠席をして、いない時などに「A子さんは本当は話をしたいと思っているんだよ」と言って聞かせ、A子の心情を理解させていった。

・ 学級のみんながお互い同士理解し合い、受け入れ合うようにさせるため、グループ・エンカウンターを活用した。

① 席がえ

T「今日で隣の人とお別れなので、今までの感謝の気持ちをこめて、握手をしながら黙って目と目であいさつをしてみよう」

この時、A子は笑顔を浮かべながら黙って相手を見ていた。一分位だったが、こんなに長い時間A子の笑顔が見られたのは初めてだった。

T（席がえ後）「それでは、今度はお互いに相手の知りたいことをインタビューしよう。ただし、答えたくない時は『今は答えたくありません。』と言ったり、黙って下を向いたりしよう。では、ジャンケンをして勝った方からインタビューしてごらん」

A子はジャンケンで負けたので聞かれる側になっていたが、相手の聞くことに対して小声ながら一生懸命答えていた。

A子と席を組ませたのは、ソシオメトリック・テストでA子が選択していたB子であった。B子の方はA子を選択も排斥もしていなかったので、担任はB子に「A子さんが、B子さんって勉強ができるしやさしいねって言ってたよ」と、A子から聞いていたことを伝えるなど、意図的にA子とB子との関係がうまくいくように働きかけをしておいた。このことは、B子は二つある女子グループの一方のリーダーであったので、孤立しがちなA子をなんとかB子のグループに入れたいと考えて配慮したことであった。

・ 朝の会で

T「今日は、学級のみなさんと握手しながら朝のあいさつをしよう」

他の子供たちは照れながらも男女の区別なく行動していたが、A子は自分から歩こうとはせず、友達が来るのを待っていた。しかし表情は明るかった。

・ 子供たちとのかかわり合いが一番多い授業でこそ、人間関係を大事にしなければならぬと考えて、授業に教育相談的な手法を生かしていった。特に、子供たちの発言の裏にある気持ち、例えば「自信がないなあ」とか「間違ったらどうしよう」とかの気持ちを考えて受容的に接した。また、一人一人が学級の主役になれるように、例えば、漢字博士とか分数のチャンピオンとか、それぞれ個性を生かしていった。A子の場合は、特技のピアノを生かして、学級のみんなに認めさせたいと考えて意図的に音楽の時間、ピアノの伴奏を頼んだりした。以下は、その時の様子である。

T「A子さん、先生、ちょっと用事ができたので、代わりにピアノの伴奏頼むよ」

この後音楽室に帰ってみると、曲の出だしのところで「はい」と声をかけながらピアノを弾いていた。担任も驚いたが、子供たちもびっくりした様子であった。子供たちはA子が声を出したことには触れないで、「先生がピアノを弾くよりA子さんの方がいい」と盛んに口にした。A子の存在が認められ、そして、みんなの前で初めて声をだした日だった。A子は顔を赤くしながらも、満足そうな表情であった。

(3) 家族への指導援助

・ 「話す」ことへの心理的な圧力をかけないようにするため、両親には次のような言葉をA子に言わないようお願いした。